

# 大原の里と比良の山

大原のオオムラサキを守る会  
蓬萊むしの会  
第24号 2026.3.10

## 遊蛾党へのお誘い

村上 豊

先の衆議院選は、立民党の壮大な自爆と自民党のぶっちぎりの大勝に終わりました。この2026年2月に私は立ち上がり、ここ「大原の里と比良の山」誌上に結党の意思を表明するに至りました。

党の名称：遊蛾党（ゆうがとう）

党首：村上豊

党員：1名（2026年2月末現在）

結党の目的：蛾類を観察することから、環境の状態や変化を理解する。

党員の要件：なし、他の党や会合・会派との重複所属を妨げない。

党員の心得：日常生活を通じ、常に蛾類の存在を意識すること。また能う限り、画像を残して蛾の出現情報を蓄積する努力をすること。

党の集会・イベント等：予定なし

日常生活においても蛾類を時折見かけられるでしょうが、多くの場合は嫌われた揚げ句、駆除の対象となったりします。そんな蛾たちにもその場所に出現する事情と歴史があり、またその存在そのものが周囲の環境を反映しているに相違ありません。この拙文の読者諸兄には、殺虫スプレーを噴霧する前に、そのことを意識して彼らを観察・記録してほしいのです。よく見れば中々渋い色調や文様が認められることと思います。またその多様性にも目を見張ることになりましょう。

優雅に蛾と遊ぶことを念頭に、党名を「遊蛾党」としました。わが党員が活動するところには、誘蛾灯に惹かれるように蛾たちが集まって来たらいいのに、という願いも込めました。前述のように党員の要件は特にありません。また、入党の申し込みをする必要もありません。先の心得を守っていただけの人なら誰でも今日から党員を名乗っていただけます。

いささか奇抜な記事になってしまいましたが、タネを明かせば以下の通りです。先月、昆虫採集用ライトトラップ一式を衝動買いしてしまったのです。一昔前のような、発電機＋水銀灯＋白幕という大層なものではありません。大容量バッテリー＋HID灯（車用ヘッドライトを改造して紫外線を出せるようにしたもの）＋自立式の蚊帳という軽量化なった組み合わせです。これがあれば独りで灯火採集に行ける、と勇んでいましたが、やっぱり誰かと虫談義しながら採集したいじゃないですか。クマは出ないにしてもイノシシや野犬が来るのも嫌だし。ということで、灯火採集を一緒に楽しんでもくれるメンバーを募りたい、というのが真の目的なのでした。持って廻って申し訳ありません。

最後に、私が優雅に蛾と遊んでいる様子が写っている画像を掲載します。

撮影日時：2026年2月27日 08:55

撮影地：大阪府枚方市 山田池公園

撮影者：村上豊

蛾の種類：トビモンオオエダシャク（シャクガ科）

興味を持っていただいた方、ご連絡をお待ちしています。以下までメールにて。

[jym-0644@zeus.eonet.ne.jp](mailto:jym-0644@zeus.eonet.ne.jp)



大原 いのちの季（とき）

弥生

### ホトケノザ

日に日に暖くなり大原の里でも春の兆しを感じられるようになりました。道端や畑の畔などで薄紅の小さな花を咲かせているのはホトケノザです。

ホトケノザはシソ科の草で成長すると10~30cmほどになります。根元で枝分かれして先は直立します。葉は縁がギザギザで対生につきます。茎の下の葉には葉柄がありますが、上の葉にはなく茎を抱くように真ん中で合わさって丸くなります。葉が茎に段々につくことからサンガイグサ（三階草）とも呼ばれます。

春になると葉のわきに薄紅色の花をつけます。その様子がハスの台座に座る仏像のように見えることからホトケノザと呼ばれるようになったようです。

なお、春の七草のホトケノザはコオニタビラコというキク科の植物でよく間違われます。本種は食べられませんので注意しましょう。（文 小松清弘 写真 的場亮一）



## 花長下神社のヒメハルゼミ

藤野 適宏

### 1. はじめに

ヒメハルゼミの鳴き声を聞くのは私の長年の夢であった。図鑑でヒメハルゼミという名のセミが存在することを知ったのは子どもの頃だったが、それが照葉樹林に生息していて、代表的な生息地の一つが岐阜県谷汲村(現.揖斐川町谷汲)の花長下神社であるということを知ったのは1999年、偶然手にとったある雑誌に紹介されていたからである。間歇的に大合唱をするという。谷汲村はギフチョウの生息地として、また村内にある華巖寺は西国三十三所の第33番札所で満願霊場として知られていた。谷汲昆虫館の所在地でもある。

何としても声を聞きたいとの思いから、発生時期も合唱時間もわからないまま、2000年8月6日、花長下神社に出かけたが、残念ながらヒメハルゼミの声を聞くことはできなかった。そのときに撮影した神社の全景が図1、境内にあったヒメハルゼミの案内板が図2である。

花長下神社のヒメハルゼミは村内では著名なようで、道を尋ねた人たちはすべてこのセミのことを知っていた。ここのヒメハルゼミは昭和13年に発見され、戦前は国指定の天然記念物であり、戦後は県指定の天然記念物であること、花長下神社は村はずれにあり非常に狭い境内で、大きなウラジロガシのほかは数本のアラカシやスギがあることを知った。

そのあと、ヒメハルゼミのことは意識から薄れてしまっていたが、2005年になって旧知のOさんから、大阪自然史博物館発行の“Nature Study 51(6),2005”のコピーが送られてきた。

『奈良市春日山におけるセミの16時間の観察ーヒメハルゼミの発音活動を中心にー』と『ヒメハルゼミを大阪から初発見!』の記事があり、それによってこのセミの発生時期や発音行動

の詳細を知ることができたばかりでなく、生息場所調査の気運が高まっていることを知った。

花長下神社再訪問の計画をこれも旧知のYさんに持ちかけたところ、彼自身昨年訪れて鳴き声を聞いていて、今年は羽化の様子を写真撮影したいという願望を持っているということで、俄かに計画が具体化して、2005年7月9日、2人で出かけることになった。

### 2. 2005年7月9日の記録

梅雨の真っ只中で連日の雨模様。この日も曇天で、午後から雨の予報。絶望的な空模様ではあったが、近年、天気にはついていないこともあってとりあえず行ってみることにした。



図1 花長下神社全景

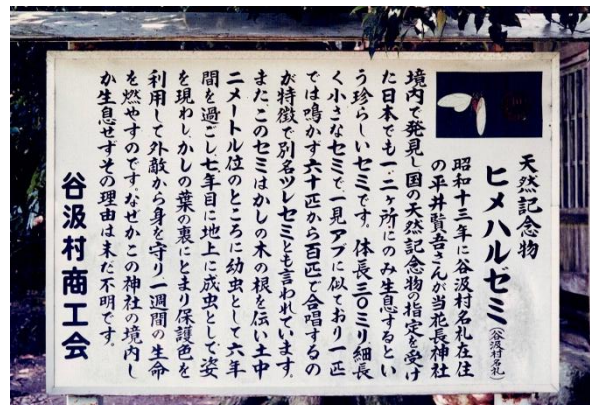


図2 境内のヒメハルゼミ案内板

何やかやと出遅れて、Yさんの車で宇治にある私の自宅を出発したのは15時を回っていた。名神高速道路走行中、何とか小降り程度でこらえてくれていた空も、谷汲村に近づくほどに雨脚が激しくなって、おまけにそれぞれの過去の記憶が不明瞭で、なかなか花長下神社にたどり着けない。出会う人に道を尋ねるのも、雨音が邪魔をして至難の業となった。

土砂降りの雨の中、花長下神社に到着したのはすでに18時を過ぎていた。神社横に車を停めて車中で待機するほどに、雨は小降りとなってきて、傘はあるが境内を歩き回れる状態になり、いくつかの脱皮殻を見つけることもできた。そして、ほとんど雨があがるのと相前後して、ヒメハルゼミの声を聞く。18時28分であった。

ヒメハルゼミの大合唱が始まったのはその3分後、18時31分のことだった。

「これがうわさに聞き、今日まであこがれ続けてきたヒメハルゼミの大合唱か！これはすごい。」

ワシワシといつまでも境内に響き渡る大音響に、絶望的な気持ちで到着したこともあって、2人はしばらくは興奮気味であった。

鳴き声は強くなり弱くなりして、なんと19時13分まで42分間続いた。私たちが持っていた『間歇的に鳴く』という知識とはかけ離れた結果だが、「雨で長時間鳴けなかった鬱積を、ここで一挙に晴らしたにちがいない」と話し合った。

その間境内を歩き回り、地面から出て幹を登攀中の幼虫の発見(図3)、待望の成虫の発見(図4)があった。それ以外にも、クロコノマチョウが雨宿りしているのを見つけたり、どこから現れたのか大量のカマドウマをウラジロガシの樹上に見つけて驚いたり、楽しい時間を過ごしたが再び雨が降ってきたこともあって、羽化の撮影は次回に行くこととして、19時30分、帰路についた。



図3 幹を登攀中の幼虫



図4 待望の成虫の発見

### 3. 2005年7月18日の記録

羽化の様子が見られなかったことや間歇的な鳴き声を聞かれなかったこと、いやそれ以前にあの感動的な鳴き声をまともな気象条件下でもう一度聞きたいと思った。前回参加できなかった小松清弘さんとOさんに声を掛けたところ参加できるとのことで、4人での観察行となった。

15時32分、花長下神社着。前回とはうって変わっての快晴である。ヒメハルゼミは2分後の15時34分には早速、大合唱で出迎えてくれた。

大合唱を聞きながら各自、気の向くまま境内を散策。まず気付いたことは、前回は薄暗い中、脱皮殻は少ししか見つからなかったが、境内の大木を見上げると、手の届かないようなところ

に多くの脱皮殻が発見できたことである。Yさんは脱皮殻を採集するという事なので、いくつかの測定をしてから採集しようということになった。

以下にヒメハルゼミ合唱の時間的推移、ヒメハルゼミ脱皮殻の付着している樹種、付着位置の地上からの高さ及び幹に対する方位、そして唯一目撃できた羽化の様子を報告する。

## (1) ヒメハルゼミ合唱の時間的推移

### ①調査方法

合唱の開始と終了時刻を4人で確認しながら記録していき、後日、羽化状況等を収めたビデオカメラを再生して再確認を行った。調査開始時刻は15時32分、調査終了時刻は19時50分であった。

### ②結果と考察

境内の樹木は2本のウラジログシが目立って高く、その他の高木・亜高木としてスギ、ツバキ、アラカシがあった。境内の裏手はスギが植林された斜面が迫り、それ以外の3方向は田畑であった。小松さんは裏手の斜面上方に行き、鳴き声のする方向を調べ、狭い境内でのみ声がすることを確認した。これによって花長下神社のヒメハルゼミは、主に境内の2本のウラジログシをよりどころに、長年発生を続けていることが推測できた。

表1はヒメハルゼミの間歌的大合唱の開始時刻と終了時刻を表わしたものである。調査開始から調査終了まで、聞くことができた大合唱は12回であった。調査開始から2分後に1回目の大合唱があった。12回目の大合唱終了後、25分間待機したが次の大合唱が始まることはなく、この日の大合唱は終了したと考えて19:50に調査を終了した。因みに2025年7月18日の揖斐川町の日没は19:11なので、ヒメハルゼミの大合唱は日没を契機に終了するのかもしれない。

各回ごとの大合唱継続時間を図5に示した。1回目から3回目までは継続時間は5分以内であった。4回目から11回目までは5分以上あり、平均11.1分であった。このあたりが本格的な合唱時間帯なのかもしれない。

大合唱継続時間で突出していたのは、最終回の18時56分から19時25分までの29分であった。7月9日に訪れたとき、18時31分から19時13分まで42分間鳴き声を聞いて、「雨で長時間鳴けなかった鬱積を、ここで一挙に晴らしたのだろう」と書いたが、鳴き納めにもっとも長時間合唱する傾向があるのかもしれない。と言うのも、『奈良市春日山における…』でも同様で、そこではその時間帯に44分間鳴いて、「間歌的な合唱は昼下がりから徐々に回数を

表1 大合唱の開始時刻と終了時刻

合唱番号	合唱開始時刻	合唱終了時刻	特記事項
1	15:34	15:37	15:32調査開始
2	16:01	16:04	
3	16:21	16:26	
4	16:27	16:43	
5	16:49	16:58	
6	17:11	17:26	ヒグラシ、アブラゼミ混声
7	17:27	17:38	ヒグラシ、アブラゼミ混声
8	17:40	17:52	
9	18:00	18:08	ヒグラシの声盛ん
10	18:21	18:33	
11	18:39	18:45	
12	18:56	19:25	19:50調査終了

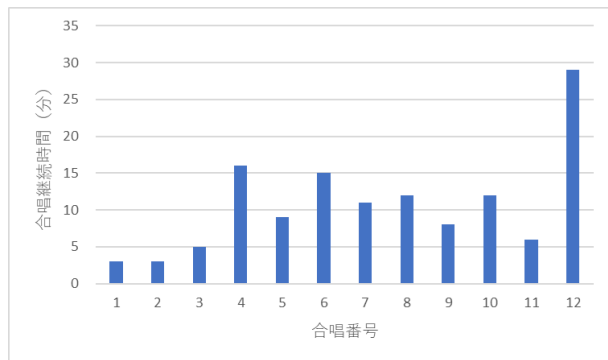


図5 大合唱継続時間の推移

増やしていきましたが、すべてはこの黄昏時の大合唱のための「発声練習」のようにさえ思われました。」とある。これが本当ならとても愉快である。

各回の大合唱終了から次の大合唱開始までの時間を図6に示した。1~2回目と2~3回目が顕著に長く、平均20.5分であった。それ以降の平均は6.8分であった。1から3回目までの大合唱継続時間が短かったことに呼応した結果だと言える。大合唱する気持ちが昂るまでの準備期間なのだろうか。それ以降の時間はばらつきが大きい。これは1頭が鳴きだすと、それに呼応して他の個体も鳴きだす習性と関連があると考えられる。

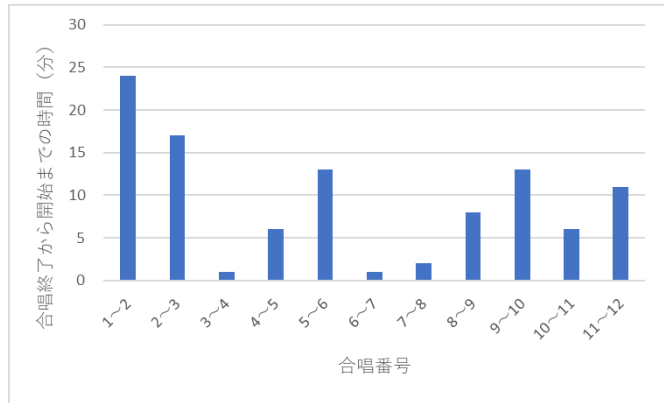


図6 各回の大合唱終了から次の大合唱開始までの時間

(2) ヒメハルゼミの脱皮殻が付着していた樹種及び樹高

①調査方法

境内に生育するウラジログシ(2本)、スギ(2本)、ツバキ(1本)で脱皮殻を探し、捕虫用継竿に巻尺を取り付けて、発見した脱皮殻ごとに地上からの高さを実測した。

②結果と考察

発見した脱皮殻の数は、ウラジログシ a が 19、ウラジログシ b が 16、スギ a が 11、スギ b が 5、ツバキが 40、合計 91 であった。この結果を見るまで、私たちはこの神社での主な寄生樹木は、圧倒的に太いウラジログシだろうと一方的に思っていたのだが、予想に反してツバキに付着していた脱皮殻がもっとも多かった。ただし、圧倒的に太いウラジログシの根は境内中を縦横に伸びているであろうから、この結果からツバキの根をもっとも好んで寄生するとは言いきれない。また、今回の調査樹種の選定は、神社内の樹木を見て脱皮殻が多く着いていると思えるものを任意に抽出したもので、客観性に欠ける。他所での調査も行い、確かな傾向をつかんでいきたい。

樹高の測定の結果を図7に示した。脱皮殻の付着している位置がもっとも低いものは地上から20cm、もっとも高いものは628cm、 $311.5 \pm 11.8$  (平均値±標準誤差) で、平均値への集中度が高い。ただし、私たちが調査する前に訪れた人によって採集された個体があることは否定できず、低位置の個体数はもっと多かったのかもしれない。

この結果から見る限り、多くの幼虫は3m前後まで登り羽化するようである。この高さまで登れば、地上を徘徊する多く

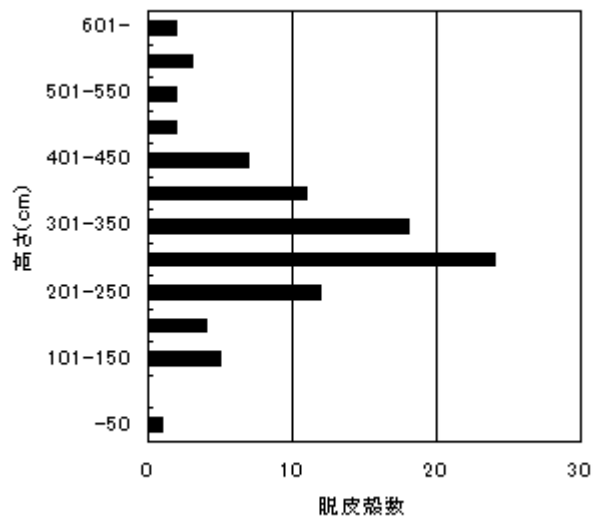


図7 脱皮殻が付着していた樹高

の捕食者から逃れることができるであろう。

### (3) ヒメハルゼミ脱皮殻が付着していた幹に対する方位

#### ①調査方法

(2)の脱皮殻が付着していた高さを調べる際、方位磁針を用いて付着していた幹に対する方位を8方位で調べた。

#### ②結果と考察

結果を図8に示した。付着方位が東～南に集中しているのが明らかである。この理由ははっきりとは言えないが、神社の北西は急斜面の山が迫っていて、それとは反対の方向、つまり道路に面したより明るい方向で羽化することを示唆していると考えられる。

ヒメハルゼミの地表からの移動・羽化は夕方が多いと聞いている。より早く翅を乾かして飛翔するためには、このときの太陽が位置する西の方向で羽化するのが有効だと考えられるが、大きくずれて東～南に集中した結果により、ヒメハルゼミの羽化はより明るい方向を選択して行われると考えられる。

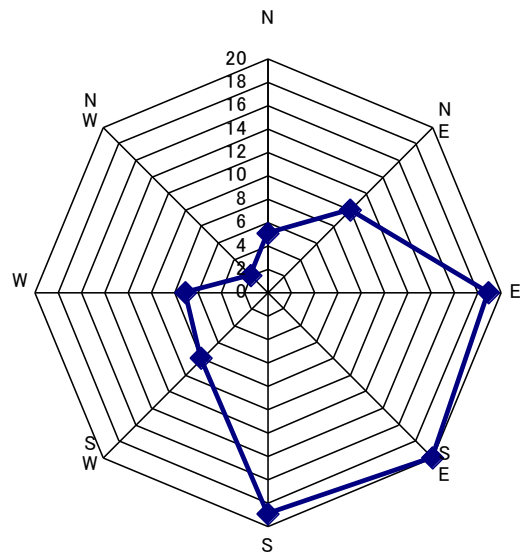


図8 脱皮殻が付着していた幹に対する方位

### (4) ヒメハルゼミの羽化の様子

#### ①調査方法

17時少し前、神社境内南西にあるアラカシの幹を移動中の幼虫をYさんが発見した。その羽化に至るまでの様子をビデオカメラで撮影し、後日再生して要点を書きだした。なお、この日羽化が目撃されたのはこの1個体だけであった。このことから、ヒメハルゼミの発生は2005年7月18日現在では終期だと推測した。

#### ②結果

羽化の様子を時間を追って記録したものを次に示す。

17時前 幹を登ろうとしている幼虫を発見する。

17:06 幼虫が観察者の頭部付近まで到達して、撮影困難になる可能性が出てきたので、羽化に悪影響が出ないように工夫して、根際に下ろす。それとともに動画撮影を開始する。幼虫はしばらく移動を中断する。

17:16 移動を再開する。

17:33 移動終了。胸高あたりで撮影に好都合である。

17:52 すでに背中が割れ、羽化が始まっていた（なぜか17:42から10分間、ビデオに空白があり、羽化開始時間が捉えられていない）(図9)。

17:55 翅が出る。

17:56 前肢、続いて中肢が出る。身体が反り返り始める。

17:59 後肢が出る。

18:01 90°以上身体が反転し、尾端だけが殻と接続している状態になる。

18:09 一挙に元の姿勢に戻る。この間、13分間は肢が硬化するのを待っていたと考え

られる。同時に翅が伸び出す。長い産卵管が見えて♀とわかる。

18:12 前後翅が伸びきる (図 10)。

18:22 少し左に移動し、左肢は殻から離れる。

18:31 開き気味の翅が閉じられ、腹端がほぼ見えなくなる。

18:49 動画撮影終了。その後撮影した静止画が図 11 である。

背中が割れてから翅が伸びきるまでを羽化所要時間だとすると約 22 分で、意外と早く羽化は終了した。しかし、翅がかたまって自由に飛べる状態になるのは、翌日であろう。



図 9 羽化開始の様子  
(17:53。背景は社殿)

図 10 羽化終了直後(18:16)

図 11 羽化終了後(19:09。翅  
が透明になっている)

#### 4. おわりに

この調査を始める少し前、2005年5月8日にYさん、Oさんと静岡県磐田市へベッコウトンボを見に行った。ちょうど名神高速道路の車窓から見える山々はシイの花盛りで、その花のかたまりが京都から東へ行くほど濃密になっていき、改めて近畿地方が古くから開発の手が入っていて、照葉樹林が消えてしまっていることを感じた。ヒメハルゼミの分布も同様で、照葉樹林に住むこのセミは近畿地方に多くの生息場所があってもよさそうに思えるが、現実には逆に東海地方から関東や新潟に有名な生息場所がある。

しかし、近畿地方にまったくいないわけではなく、前述の奈良市春日山だけでなく、この花長下神社のように小面積でも密かに生き続けている場所があるかもしれない。それにしても何と移動性の乏しいセミなのだろう。

今回の調査で一挙に多くのことを知ることができた。それとともに、多くの疑問も生まれてきた。15時台に大合唱が始まると考えていいのか、合唱時間のピークは本当に鳴き終わりのときなのか、幼虫時代に好む樹種は何なのか、本当に3mもの高さで羽化するものが多いのか、本当に開けた方向で羽化するのか、などなど。次のヒメハルゼミとの出会いを楽しみに待ちたい。(2005年10月28日)

#### 5. 追記

この報告書は2005年10月28日に書き綴ったものである。この度、『大原の里と比良の山』24号用に、読み直し手を加えた箇所もあるが、基本は元の文意のままである。また、この調査はYさん、Oさん、小松清弘さんと共同で行ったものなので、本来は4者の共著とすべきであるが、諸般の事情で藤野単独の報告となった。3名の方々にお許しいただきたいと思うとともに、共に調査が行えたことに厚く感謝申し上げる。

## 雪の大原

藤野 適宏

2026年2月8日、京都市にまとまった雪が降りました（京都地方気象台で11cm）。その2日後に行った飼育網室や周辺の様子を写真で紹介합니다。積雪15cmほどでした。



雪の上に足跡が。ウサギのようです。



網室もエノキに掛けた大袋も大丈夫でした。



網室内もビニールシートのおかげで、大丈夫。



大袋内にも積雪が。1mmの網の目をくぐって降雪が入った？



キジョランは萎れているけれど、大丈夫でしょう。



発泡スチロール内のオオムラサキ幼虫もおおむね元気そう。カビに冒されているような幼虫（赤丸）がいてちょっと心配。



キジョランのアサギマダラの若齢幼虫  
左は元気な幼虫、右は寒さに耐えられなかった？

## <2月おもな活動の報告>

◆2月4日(水) 10:00～ (報告者:小松)

○参加者 藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、小松 計 7名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容 ②ハンドチェーンソーのカバーの発注  
③プリンターの修理について ④堆積場の囲いについて  
⑤ワークショップのテーマの提案 ⑥頭角調査について
- ・作業 ①堆積場の囲いの制作 ②剪定枝の処理  
③網室周辺のエノキへの大袋掛け

◆2月18日(水) 10:00～ (報告者:小松)

○参加者 藤野、木村、塩尻、的場、大友、村上、上田、小松 計 8名

○活動内容

- ・会議 ①本日の活動内容 ②頭殻測定の説明と用具配布  
③講演会紹介 ④ハンドチェーンソーのカバー修理完了報告  
⑤網室のビニル張りの報告
- ・作業 ①腐葉土ピット(名称決定)の囲い設置 ②剪定枝の処理  
③網室周辺のエノキへの大袋掛け ④網室のエノキの囲い内への落ち葉入れ

【あとがき】晩秋から早春にかけて、時折、近くの宇治川の堤防や河川敷に散歩に出かける。運動不足解消と水鳥観察のためである。堤防はおおよそ安定した植生だが、河川敷は植生の移り変わりが激しいことを知った。洗い流されたりして植生が安定しないのだろうか。センナリホオズキやムラサキカッコウアザミ、ナルトサワギクなどの外来種がおもで、ひそかに行く末を楽しみにしたが、いずれも今はまったく見られない。

そのような中で着実に群落を大きくしているものもある。ナヨクサフジとニセカラクサケマンである。とりわけ、後者を最初に見たときは、エンゴサクの仲間が河川敷にあると驚いた。長らく和名が分からなかったが、最近知ることができた。グーグル・レンズのおかげである。与えればウスバシロチョウが食ったりするのだろうか。(藤野)



ニセカラクサケマン 260226

## = 目 次 =

遊蛾党へのお誘い	1
大原 いのちの季(とき) 弥生 ホトケノザ	2
花長下神社のヒメハルゼミ	3
雪の大原	9
2月おもな活動の報告	10
あとがき・目次	10

発行 大原のオオムラサキを守る会・蓬萊むしの会 2026年3月10日 第24号

H P 大原のオオムラサキを守る会 <https://ohara-omurasaki.com/>

大原のオオムラサキを守る会代表 〒606-0044 京都市左京区上高野仲町54 小松清弘

蓬萊むしの会代表 〒520-0105 大津市下坂本1-40-16 大友正生

編集 〒611-0011 宇治市五ヶ庄西川原21-151 藤野適宏